

EU 支部長: 松原真実子 MATSUBARA Mamiko 国際文化研究専攻修了 修士論文『異文化間コミュニケーションの研究—フィードバック作用—』

この号の内容

1 イタリア メダルダッシュで「アリガトウ」？世界各国は東京五輪をこう見ていた

・イタリアにとって「我らの人生最高の五輪」だった

・ブラジルは今、東京五輪に対してサウダージの中にある

・イスラエルにとって東京五輪が特別な大会となった理由

2 EU 支部だより

・イタリア 五輪に救われた

・ブラジル 日本人に感謝

・イスラエル 49年目の黙とう

イタリア メダルダッシュで「アリガトウ」？ 世界各国は東京五輪をこう見ていた

イタリアにとって「我らの人生最高の五輪」だった

東京五輪で美しく輝いた海外女子アスリート 10人 パオロ・フォルコリン

今から30年近く前、イタリアでは『我らの人生最高の日々』という曲が大ヒットした。今、イタリアではそれをもじって「我らの人生最高の五輪」と言われている。東京五輪でイタリアはこれまでの記録36を大きく上回る、40のメダルを手に入れたからだ(金10、銀10、銅20)。(中略)これは本当にすごいことである。実のところ、イタリアでは五輪はそれほど人気のある大会ではない。サッカーのW杯などに比べたら、注目度はかなり劣る。イタリアがこれほど五輪で盛り上がったことは、これまで見たことがなかった。(中略)陸上男子100メートルで優勝し、歓喜のマルチェル・ヤコブス(イタリア)その熱狂が最高潮に達したのはやはり陸上男子100メートル決勝だろう。マルチェル・ヤコブスが9.80秒でこの花形競技を制し、金メダルを首にかけた時、イタリア人の多くが信じられない思いだった。その少し前に男子走り高跳びで金メダルを獲得していたジンボ(ジャンマルコ)・タンベリとのハグのシーンは、何度も何度も繰り返し放送され、そのたびにイタリア人の胸を熱くした。(中略)イタリアは新型コロナの流行で大きな犠牲を払った国だ。これまでに多くの人々が亡くなった。日々、東京から届くメダルのニュースは、イタリアという国に再び自信と希望をもたらしてくれた。「我らの人生最高の五輪」東京五輪がイタリアに贈ってくれたものだ。異例の状況下での開催となり、日本はいろいろと大変だったと思う。しかしイタリア人はこの五輪に本当に救われた。開催してくれた日本に「アリガトウ」と、誰もが伝えたいと思っている。

ブラジルは今、東京五輪に対してのサウダージの中にある リカルド・セティオン・ライター

五輪の歴史の中でも、今回の東京大会は(中略)もしかしたらとんでもない大会になるのではないかと、私は心配していた。しかし、日本で戦ったブラジルの選手、コーチ、取材陣にいたるまで、誰ひとり、この大会を批判する者はいなかった。それどころか「決して忘れられない思い出になった」「日本人の対応は本当にすばらしかった」という称賛の声ばかりが聞かれた。ブラジルは東京で21のメダルを獲得した。なんと前回の自国開催のリオ五輪での19を上回る数である。メダルランキングでは世界12位に入り、南米では第一位である。誰もが熱狂し、朝の3時や午前中の早い時間の競技でも、人々はテレビにかじりつき、テレビ視聴率は過去3年で最高の数字を叩き出した。子どもからお年寄りまで、そして新型コロナに伏せている者までが、一瞬、すべてを忘れて五輪に見入った。ブラジルは世界で三本の指に入る、新型コロナによる死者数が多い国である。そんなブラジルに、東京五輪は従来の陽気さを取り戻させてくれた。(中略)今まで人が集まれば新型コロナの話ばかりだったのが、徐々に明るい話題に花を咲かせた。(中略)ブラジルは今、東京五輪に対しての大きなサウダージの中にある。サウダージとは、愛するものを失った時にブラジル人が感じる郷愁だ。これからはまた現実に戻らなければいけない。それでもこの約2週間で、人々は多くの勇気もらった。久しぶりに喜びと感動とドキドキする気持ちを取り戻した。この大会を開く勇気を持った日本人に、ブラジル人は感謝している。

イスラエルにとって東京五輪が特別な大会となった理由 リカルド・セティオン(イスラエル)

イスラエルにとって東京五輪は、スポーツの祭典以上の意味を持つものとなった。その理由は開会式にある。1972年のミュンヘン五輪で、パレスチナの武装組織が選手村に侵入し、イスラエルの選手とコーチ11人を殺害した。(中略)世にいうミュンヘンオリンピック事件である。驚いたことに、この事件が起こったあともミュンヘン五輪は続けられた。(中略)遺族たちは長年IOCに対し、五輪で正式に犠牲者の追悼を行なうように求めてきたが、IOCはなかなかこれに応じようとはしなかった。(中略)しかし、今回の東京五輪では、49年目にして初めて、公の場で犠牲者への黙とうが捧げられた。この事件で夫を亡くした遺族も招待され、涙を流した。これにはイスラエルの人々の多くが感動した。ついに彼らの追悼を実現してくれた日本に、感謝の気持ちでいっぱいだった。こうした経緯もあって、イスラエルでの東京五輪へ関心は非常に高かった。街角で、カフェで、人が集まれば自然に五輪の話となった。東京の今日の天気も、札幌の明日の気温も、大会マスコットの名前さえ、みんな知っていた。それに加えて、イスラエルは今大会で史上最高となる4つのメダル(金2、銅2)を獲得した。金メダルは、過去にアテネ五輪で1つ獲ったことがあるだけだったので、イスラエルはこの快挙に沸いた。特にイスラエル人を一番熱くしたのは、新体操の女子個人総合のリノイ・アシュラムだ。(中略)彼女がメダルを獲得した際には、テレビもラジオもすべて通常の番組を中断して速報を流し、開催中だった国会の予算委員会も一時ストップして皆で彼女の演技を見たという。(中略)日本が金メダル数で3位についたことも、イスラエルの人々は我がごとのように喜んでいて、感謝と称賛。それが東京五輪に対するイスラエルの人々の素直な気持ちだろう。

EU 支部だより -上を向いて歩こう-

コロナで皆がつらく、顔も心も下を向きがちな今だからこそ、喜びとか感動とか、ドキドキする気持ちをあじわいたい。そして、少しでも元気に上を向いて歩いていきたい。そんな思いを叶えてくれた明るい出来事が、東京オリンピックだったと思います。そこで今回は、僭越ながら私の明るい出来事をご報告します。①恐々コロナワクチンを接種するも、え！というほどなんともなかったこと。②宝くじで人生最高額¥1200円が当たったこと。③LDLコレステロール値が8年目でやっと正常値になりお医者様に褒められたこと。④鉢植えの稲とトマトときゅうりが収穫できたこと。⑤ほうじ茶味のプロテインが美味しくてリビしたこと。⑥炊飯器で豆をゆでたら超絶美味しかったこと。⑦夫の論文が、『International Journal of Environmental research and Public Health』誌に掲載されたこと。タイトルは「Big Data for Biomedical Education with Focus on the COVID-19」。毎日いろんな幸せをみつけて感謝。♪上をむいて、あーんこおお♪(松原)



- ・喜び、感動、ドキドキ
- ・International Journal
- ・Biomedical Education

International Journal of
Environmental Research
and Public Health